
緋弾のARIA ～怠情な武偵～

死獅子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア ～怠惰な武偵～

【Nコード】

N3642Q

【作者名】

死獅子

【あらすじ】

主人公は神様の手違いではなく、ただ普通に死んだ。

そんな彼は神に異世界に行かないかと提案され、それを受諾する。

チートな能力をもらい行った世界は緋弾のアリアの世界であった。

チートだったり、原作と違うところもあります、そうゆづのが嫌いな人は戻ってください。

主人公・・・異世界へ旅立つ

どうやら俺は死んだらしい。

らしいというのも俺には死んだ時の記憶が無いからだ。

俺は目が覚めるとそこは白い空間で、そこには白い髭を生やした爺さんがいた。

そいつは神（笑）らしく、俺が死んだことを教えてくれた。

別にテンプレの神（笑）が俺を殺したわけではなく、普通に死んだらしい。

何故俺がここに居るのかというと、どうやら神（笑）は暇らしく娯楽を求めていたらしく、俺をここに呼んだようだ。

神は俺にどこかのアニメやラノベ、漫画などの世界に行って欲しいらしく、俺の人生を見せて欲しいらしい、プライベートなどは覗かないらしく、原作をどのように変えていくのかを見たいといっている。

俺もオタクなので、そのような話は断るはずもなくYes!と即答した。

残念ながら行く世界は神（笑）でも選ぶことは出来ないらしい、が種類は選べるらしくどうやら学園戦闘物の世界に行くことになるようだ。

その世界に行くのだからと神（笑）はアニメ・ラノベ・漫画の中から5つまで能力をくれるらしいので、俺は

- ・ビーズを爆弾に変える能力
- ・一秒を十秒に変える能力
- ・王の財宝（中身無し）
- ・無限の剣製（宝具は投影できない、投影は名剣などの類だけ、固有結界の発動はできない）
- ・空間移動（結標と同じような能力）

を貰った。（剣製はリスクなし）

もつとチートな能力（例えば一方通行や東方のくする程度の能力）を貰っても良かったが、それでは人生に張り合いが無くなってしまったためやめた。

そんな俺の能力の選び方に何を感じたのか急に神（笑）が「感激したっ！」とか言い始め、勝手に死にそうな攻撃がきたら10秒前に知らせってくれる未来予知のような能力を与えたのと、転生体の身体能力を原作の10倍にまで上げてしまった。（しかし、転生体が貧弱だったら意味無いんじゃないかと思わないでもない）

まあ、貰ったものは仕方ない、有効活用させてもらうか。

そういえば、と俺は『赤ちゃんからまた始めなくてはならないのか？』、と神（笑）に聞いてみたら、自分の意識は原作から始まるらしく、それまでは俺の魂の欠片を使ったもう一人の俺が生活して、原作が始まったら生前の記憶を入れるそうだ。

どうやら赤ちゃんから始めはするが記憶は無いようなので安心し

た。

テンプルの下に穴が開いて落ちることも無く、扉が目の前に出現し開き始める。

そうして俺は新たな世界へと旅立った。

主人公・・・異世界へ旅立つ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

出来れば週1のペースで更新しますので、これからよろしく願います。

主人公・・・確認する（前書き）

おまたせしました。

少し早めに出来たので掲載します。

物語は全然進んでいませんが、次話で進めるつもりです。

主人公はめんどくさがりですが、基本原作に介入する気満々です。
ちなみに主人公の原作知識は7巻までしかありません。

駄文ですがよろしくです。

主人公・・・確認する

目が覚めれば目の前には二段ベットの天井が見えた。

どうやら朝らしく出窓から朝日が射し込んできている。

枕元にある携帯で時間を確認してみると六時を少し過ぎていた。

俺は体を起こすと記憶の整理を始めた。

まず、この世界は『緋弾のアリア』の世界らしい、俺自身の名前が遠山キンジなのと、友人などに星伽白雪ほとぎしらゆきや武藤剛気むとうこうき、峰理子みねりこなどがあるから間違いないだろう。

緋弾のアリアは好きだったので、結構嬉しかったりする。

しかし、主人公に成り代わるとは思わなかったな……。

記憶を整理しているうちに、いくつかの原作との相違点が見つかった。

・俺の学科は探偵科のEランクではなく、強襲科のCランクになっている

・白雪は俺に対してデレていないようである（けれど結構仲が良い）
、でも世話焼きなのは変わっていない

・当たり前だが俺には強力な超能力が備わっている

・俺は普通の高校に転校したいなどは考えていない

一つ目は試験の日に白雪にぶつかってなくてヒスらなかったのと、

めんどくさいので力をセーブしたから、二つ目は試験の日にフラグが立たなかったのだろう、ヒスらなかったし、三つ目は神（笑）から能力を貰ったからだな、記憶が戻るまでの俺は神（笑）から能力を貰ったことは忘れていたが、どうやら能力に気づいていたらしく、制御をできるように隠れて（見つかると思んどくさいから）修行したようなので、これから先の原作でも、使おうと思えばいつでも使えるようになってる、四つ目は俺には原作知識があるので、兄さんがイー・ウーで生きているのを知っているのだから、転校したいとは思わずが無い。

ちなみに、記憶が戻る前の俺は原作知識は無かったのだが、兄さんが死ぬはずがない、と考えていたので転校など考えていなかった。

「さて、今日は神（笑）が言っていた原作開始の日——始業式か」

つまりは、チャリジャックにあう日、アリアとの初邂逅の日だ。

しようと思えば、これは回避できるだろう、ただいつもどろりに7時58分のバスに乗ればいいのだから。

しかし、それをするパートナーのいないアリアが理子との初戦闘で死亡する確立がでてくる。

そうになると、シャーロックがどのような行動を起こすのか分からなくてちよつと恐い。

飯にも化け物ぞろいのイー・ウーをまとめていた人物である。チートな俺でも勝てるか怪しい。

可能性として、パートナーが居ないのだからアリアを狙わない可

能性もあるのだが、理子はヴラドから開放されるためにアリアを倒したいはずだ、もしかしたらアリア一人でも狙ってくるかもしれない。

さあ、どうしようかな？

……ピン、ポーン……

慎ましいチャイムが鳴り、俺の意識は浮上した。

白雪が来たみたいだな。

主人公・・・確認する（後書き）

お疲れ様でした。

終わり方が半端ですね、すみませんm（| |）m
次話は白雪がです、結構性格変わっていると思うので、それはご了承ください。

来週も掲載する気なのでよろしくお願いします。

主人公・・・鈍感（前書き）

今回も駄文ですがよろしくお願いします。

主人公・・・鈍感

俺はベットから立ち上がると、ワイシャツをはおり、制服のズボンをはいてドアに向かった。

原作のキンジもこのチャイムの音を慎ましい、と言っていたが、白雪はどうやってこの音をだしているのだろうか？ チャイムは通常同じ音しか鳴らないはずなのだが。

俺はドアの前に立つと覗き穴から外をしてみる。

そこにはやはり——白雪がいた。

——ガチャ

「おはよう、白雪」

ドアを開け、白雪に声をかける。

「おはよう、キンちゃん！」

ニッコリと笑いながら、白雪も挨拶を返してくる。

「……あのさ、そのキンちゃん、って言うのやめてくれないか？
やっぱ、ハズイ……」

俺はちゃん付けで呼ばれるのに慣れていないため、それとなく言ってみた。

「あつ…ごめんね、昔からの呼び方だから、癖が抜けなくて…
…ごめんね、キンちゃん…」

俺の言った言葉に、そう言って、寂しそうに目を伏せる白雪。

白雪…確信犯か知らないが、キンちゃんに呼び方戻ってるぞ、
少しは頑張ろうぜ…。

星伽白雪。

呼び方で分かるが、俺の幼馴染だ。

家は代々続く星伽神社で、白雪はその巫女さんである。

外見はまさに大和撫子の体現者。

正直な話、かなり可愛い。こんな可愛い娘に世話をしてもらえる
俺は、かなりの幸せ者である。

「それでね、キンちゃん」

……もう、呼び方直す気ないだろこいつ。

「朝ご飯作ってきたんだけど、食べてくれる？」

白雪は伏した目をそのまま少しあげ、上目づかいでこちらを見る。

「う、うん、まあ…作ってくれたんなら食べなきゃ悪いよな」

少し声がうつわずってしまったが、白雪に部屋に入るように態度で

示す。

や、やばい……上目づかい……だと？ 白雪め、いつの間にこんな高等技術を覚えてきやがった…ガハッ……

「お邪魔します」

白雪は見栄えの良い完璧なおじぎをして、玄関にあがると、脱いだストラップシューズをきちんと揃えた。

こんなところにも育ちの良さがでるよな、などと思いながら俺はリビングへと先行する。

テーブルに着くと、白雪は反対側に座り、持っていた和布の包みを解くと、俺の前に置いた。

俺の前に置かれたのは漆塗りの重箱で、それを開けてみると中には、ふんわりとした玉子焼き、海老の甘辛煮、銀鮭、西条柿などの豪華食材が見栄えするように並べられていて、最後には白く光るごはんが詰められていた。

「これを作るの大変だったろう？」

「ちょっと早起きしただけだもん、そんなことないよ」

こんな風に言っているが、実際にはちょっと早く起きたぐらいでこんなに作ってこれるはずが無い、おそらく結構早くから起きていたか、昨日の夜からしっかりと仕込みをしておいたのだろう。

「いつも、ありがとな」

「え、そんな、私とキンちゃんの仲じゃない、お世話だって私の好きでやってるだけだし」

俺に塗り箸を渡しながら照れる白雪。

「それでもだよ、幼馴染でここまでしてくれる娘は普通いないからな、うれしいんだよ」

俺は白雪から箸を受け取ると、玉子焼きを食べる。

いつものことなんだが、ほんとーに俺好みの味付けだよな、と思
いながら玉子焼きを飲み込む。

俺は暫く白雪の飯に舌鼓を打つのであった。

「そうだよな、幼馴染だよな、自分でもそう言ってるから仕方ない
のかもしれないけど、もうちょっとは私の気持ちを考えてくれない
いいんじゃないかな？ キンちゃん……」

そんな寂しそうな白雪の言葉は俺の耳に入ることは無かった。

主人公・・・鈍感（後書き）

自分で作つていてなんですが・・・主人公死んだ方がいいと思う

主人公・・・考える（前書き）

サブタイトルって考えるの難しいですね。

考えても最終的に簡単なものになってしまいますしね。

主人公・・・考える

飯の食い終わった俺は、いつの間にか白雪が用意していた防弾制服をはおり、拳銃をベルトのホルスターに帯銃すると、棚に置いてある兄の形見（とされている）のバタフライ・ナイフをポケットに入れる。

最後に白雪が嬉しそうに俺の胸に黒い名札をつけて準備完了。（武偵高では4月は生徒全員が名札をつけるルールがある）

俺は携帯で時間を確認する。

時刻は7時30分ちよつと前。

原作介入の決断するまでもうそれほどの時間は残されていない。

介入するメリットはイー・ウー関係の任務に簡単に就けること、アリアが理子に殺される可能性を減らせること。

デメリットは介入することによるイー・ウーの化け物もとの戦闘で、能力が漏洩（さすがに能力無しじゃ、イー・ウーの化け物どもに勝てるだろうが苦戦は免れないだろう）してシャーロックがその能力を使ってくる可能性があること。

……うん、介入することによるメリットより。デメリットの方がはるかにでかいな。

しかし、アリアが殺されると原作に沿わなくなってイー・ウーの動きが分からなくなるのも問題だな、アリアが死んだとしても、兄

さんがイー・ウーにいるのだから巻き込まれるのは間違いないだろうし。

しかたねえ、アリアと完全に関わるとは決められないけど、面識だけは有った方がいいだろうし、どうせ巻き込まれるんならことを中心近くにいられるようにしたほうが安全だし楽だろう。

俺はとりあえず白雪を部屋から出すことにした。

「……俺はパソコンのメールチェックしてから出るから、白雪は先に行つてくれ」

俺は申し訳なく思いながらも、白雪に言う。

「それなら、その間にお洗濯とかお皿洗いとか――」

「いいから、いいから」

「う、うん……あのね、キンちゃん」

俺が白雪に鞆を持たせて先に行くように態度で示そうとすると、白雪が話しかけてきた。

「？　なんだ？」

「実は今朝の占いでキンちゃんに女難の相が出てて、だからそれに注意しておいて欲しいの」

「あいよ、了解」

「それと、武偵殺しにも気をつけてね」

「武偵殺し？ ああ、あれか、でもあれって犯人捕まっただろ？」

武偵殺しとは、年明けの周知メールが出た連続殺人犯のことである。

俺は理子が犯人であることを知っているのだが、世間では捕まったことになっているので白雪の話に合わせておく。

「でも。模倣犯とか出るかもしれないし……」

そんなに心配してくれるんなって……白雪はいい娘だなあ。

「ありがとうな、心配してくれて」

白雪ができるだけ安心できるように優しく微笑む。

すると白雪の顔が急に朱を帯び始め。

「っ！ ……えーと。それじゃ、またねっ！」

？ 今のは何だったんだ？ 顔が赤かったけど風邪か？ 珍しくお辞儀もせずに出て行っただし……大丈夫かな？

白雪の体調を心配しつつ、俺はメールチェックを始める。

暫くして携帯の時計を見るとすでに7時58分になっている。

（そんじゃ、バスに乗り遅れた事だし、神崎・H・アリアとの邂逅

とでもいきますか)

俺は痛くなつた腰を軽く伸ばすと鞆を肩に引っ掛けてリビングを後にする。

俺の物語はここからが始まりだ。

主人公・・・考える（後書き）

やっとアリアと邂逅できます。

こんな駄文を読んでいただきありがとうございます。
これからよろしく願います。

主人公・・・出会う(前書き)

駄文ですがどうぞ

主人公・・・出会う

「うおおおお〜！」

俺は今全力で自転車をこいでいる、なぜなら、

「その チャリには 爆弾 が 仕掛けて ありやがります」

俺の横を物騒なことを言うゼグウェイがUZI――サブマシンガン短機関銃を乗せて走っているからだ。

「チャリを 降りやがったり 減速 させやがると 爆発 しゃがります」

…… ネットで大人気のボカロの声も、こんな場面で聞くと恐怖ではないな。

原作でも理子はキンジのことを狙ってきやがったが、俺が死ぬとは考えてないのか？

狙いはアリアにパートナーを作ることだろ？ ヘタすると死ぬぞこれ。

まあ、いざとなったら能力使えば助かるけど。

「助けを 求めては いけません ケータイを 使用した場合 も 爆発 しゃがります」

俺は万が一に備え、爆発しても問題の無さそうな場所へと、自転車を走らせる。

俺はすでにこの爆弾が本物であることを知っているし、サドルの下に自転車どころか自動車を吹っ飛ばせそうな大きさのプラスチック爆弾があるのも確信済みだ。

さすがにこの大きさの爆弾が街中で爆発したら俺は大丈夫でも、周りに被害がでるしな。

それにしても、チャリジャックって普通無いよな、カー、バス、シ
ー、ハイ、様々な種類があるが、チャリだけは聞いたこと無いな。
などと暢気な事を考えていると、視界の端にアリアと思われる女の
子が、女子寮の上からパラグライダーで降りてくるのが見えた。

アリアは左右の太股につけたホルスターから黒と銀のガバメントを
引き抜くと、

「ほらそのバカ！ とつとと頭をさげなさいよ！」

バリバリバリバリッ！

俺が咄嗟に頭を下げると、その上を問答無用とばかりにセグウェイ
を銃撃した。

——さすがSランク武偵

距離は拳銃の平均交戦距離の倍以上、さらにはパラグライダーの上
という不安定な環境、それだけの不利な条件がそろっていないながらも
アリアの撃った弾は次々と命中し、敵の銃座と車輪がバラバラにさ
れる。

くるっ、くるくるっ

二丁拳銃を回してホルスターに収めたアリアはひらり、とお尻を振り子のようにして俺の頭上に飛んできた。

「おい、危ないぞ、この自転車には爆弾が仕掛けられてる、巻き込まれるぞ！」

アリアがそのことを承知なのは知っているが、一応原作どうり注意を促しておき、そのまま第二グラウンドへ入る。

「——バカッ！」

俺の真上を陣取ったアリアがげしっ！ と俺の脳天を踏みつける……意外とイタイ。

「武偵憲章1条にあるでしょ！ 『仲間を信じ、仲間を助けよ』——いくわよ！」

アリアが気流に乗り、ふわっと上昇する。

やっぱりこうなるか、俺はアリアの行動に注意を向ける。

アリアは対角線上を降下して、こっちに鋭くUターンしてきた。

そして、ぶらんとブレークコードのハンドルにつま先を突っ込み、逆さ吊りの体勢になる。

その体勢の意味を察した俺は、アリアに向けて全力で自転車をこぐ。

みるみる二人の距離は縮まる

そしてアリアと接触した瞬間、おれの体は空へ攫われた。

顔いっぱい押し付けられたアリアの女の子らしい軟らかい体から、クチナシの蕾のような、甘酸っぱい香りがした次の瞬間――

ドガアアアアアアアアアン！！！！

轟音、続いて吹き飛ばされるような爆風。

俺はあまりの爆弾の威力に、吹き飛ばされながらも思った。

……理子よ、お前は本当に俺をアリアのパートナーにする気があるのか？

主人公・・・出会う（後書き）

もう少しの間原作が続きますが、そろそろ原作ブレイクしていきたいと思います。

これからよろしく願います。

主人公・・・襲われる（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

ちなみに、今回の話は題名が思いつかないのでとりあえずの物です。
こんな作者ですが、どうかこれからもよろしく願います。

主人公・・・襲われる

とてつもない爆風に煽られ、俺とアリアは紙のように吹き飛ばされ、グラウンドの片隅にあった体育倉庫の扉に突っ込んだ。

ガラガラと音を上げ、何にぶつかったのかもわからない状態であること数瞬。

しばらく倉庫を飛ぶように進んでいるとガンッ！ とぶつかる音と共に体が停止する。

どうやらどこかに頭をぶつけたらしく、目がチカチカする。

そのまま、あまりの痛み抵抗らしい抵抗も出来ずに、俺の意識は闇に落ちていった。

○○○

「起きなさいよ、このバカッ！」

「アダッ！」

ゴン、という鈍い衝撃と上からの軽い圧迫感に俺の意識が浮上を始める。

「あんた何してんのよ、仮にも武偵でしょ、敵がすぐそばに来てるっていうのに、のんきに気を失ってんじゃないわよ」

バリバリバリッ！

頭上から聞こえてくるかわいらしいアニメ声での文句と、銃撃音に俺の体は即座に反応して臃げだった意識が一気に覚める。

目は覚めたが、なんか妙に狭く体を自由に動かせない、周りに目をやっても薄暗く自分が今どのような状況なのか、よくわからない……が、何故かアリアが上に乗っかっている。

……原作通りならここは跳び箱の中か、よく飛んでる最中にこの中に入れるもんだな、一番上に一段目が乗っかってたろくに。

ズガガガガガッ！

急に連続して背中に振動が走る。

「な、なんだっ！」

「武偵殺しのおもちやよ、追撃してきたわ」

ああ、さっきのと同じUZIね、さすがは武偵高製の跳び箱、UZIの銃撃も防げる防弾仕様とは頼もしい限りだな。

しかし、どうしようか、能力を使えば簡単に一掃できるが、今はまだ人の目に触れさせる時ではない。

「武偵殺し？ 武偵殺しってこの前捕まったろ」

一応周知メールでそう言って回ってきたしな。

「あれはダミーよ、真犯人は捕まってるない」

アリアは俺との会話をしながらも応射する。

「ああもつ、逃げられた、ここからじゃ撃つてもすぐに射線からずれられて全然当たらないし、何とかこの中から抜け出さないと」

アリアは苛立たしげに呟くところを見て一言

「あんた、所属とランクは？」

と聞いてきた。

おそらく俺が役に立つのかを確認するためだろうから、素直に答えしておく。

「強襲科のCランク」

俺がそういつとアリアがなにやら怪訝な表情をしてこちらを見にくる。

「……まあ、いいわ、それならあたしが前衛フロントをやるから、あんたが後衛バックで援護して」

どうやら、自己完結したらしく（何故怪訝な表情をしたのか分からない）俺に配置ポジションを伝えてくる。

「……出来るのか？ その格好で」

そういつてアリアに目で自分の下半身を見るように促す。

「？……っ！」

アリアは目を下にやると、一瞬で顔を真っ赤にしてスカートをおさえる。

たぶん、爆風で飛ばされた時にでもどこかに引っかかったのだろう、そのスカートはフックが壊れていた。

「ベルトを渡すけど、これじゃ心もとないから俺が前衛を引き受ける、神崎には劣るが何とかするよ」

俺は言うなり上に乗っかっているアリアをどけて跳び箱から跳び出す。

「ちょ、あんた——」

何か後ろで言っているが、俺の耳にはもう入ってこない。

この世界での記憶が戻ってからの初めての戦闘だ、気張って逝きますか…じゃない、行きますか。

主人公・・・襲われる（後書き）

この小説のキンジはロリコンじゃないのでアリアではヒスリません。原作のキンジと一緒にヒルテリアモードの制御は出来ませんが、アリアじゃ興奮しません。これからもよろしくです。

主人公・・・異世界へ旅立つでの主人公の能力を変更しました。理由は正直チートすぎると思ったからです。

主人公・・・戦闘する（前書き）

サブタイがいい加減すぎる・・・軽く鬱だ。

第一話の内容を変更しました、まだ見ていない人は見てください、能力を減らしたり足したりしました、もうこれ以上の能力の変更はせずに書いていくので、これからよろしくお願いします。

主人公・・・戦闘する

俺は跳び箱から飛び出るとすぐに一秒を十秒に変える能力を発動する。

これならば傍から見ればただ早く動いているだけにしか見えないし、動く早さを抑えれば不自然にも見えなだろうと考え発動した。

実戦で能力の使用はこれが初めてなので緊張する、神（笑）が何か細工したのか以前の俺は能力を実戦で使用することを忌避していた、しかし前世の記憶が戻りその忌避も無くなった、依然として能力が他人にばれるのをよしとはしないが、ばれないくらいなら能力の使用をしようと思えるようにはなっている。

見える範囲にあるUZI付きのセグウェイは体育倉庫の外に7台、俺は高鳴る鼓動を聞きながらUZIを見据える。

すると、次の瞬間急激に世界が速度を失いはじめた。

UZIの銃口から銃弾がこちらに飛んできているのが見える。

UZIの銃口初速度は毎秒400メートル、それが十分の一、つまりは毎秒40メートル、常人にとってはこれでも速いのかも知れない、しかも数台による掃射、常人ではとてもではないが避けきれない、しかし俺は神（笑）に原作のキンジの10倍の身体能力を貰っている、つまりはスピードと動体視力だけでも原作ヒステリアモードの約3倍、それを俺が避けきれないはずがない。

UZIから撃ちだされる弾丸を俺はギリギリの線を見極めながら

避けていき、その勢いのまま体育倉庫の外へ身を晒す。

ズガンズガンッ！

背後から撃ちだされる銃弾が2台のセグウェイに当たり、セグウェイが壊れる。

どうやらアリアの援護のようだ。

俺はアリアがセグウェイを壊したことによってできた隙に体を潜らせるように体制を低くしながら入る。

すぐにその隙を埋めるかのようにUZIの銃弾が俺を追いかけてくる。

しかし、俺はUZIの銃弾が追いつく前に、ホルスターからM9 2Fを抜きUZIに狙いをつける。

ババババンッ！

スガガガガッ！

放った銃弾は5発、その全てが吸い込まれるようにUZIの銃座に命中する。

銃弾の命中したUZIは吹き飛ばされ、セグウェイは折り重なるように倒れた。

全てのセグウェイが動かないのを確認すると、俺は援軍がないか確かめるため神経を研ぎ澄ませセグウェイの駆動音がないかを聞

く。

どうやら援軍はないらしくセグウェイの駆動音は聞こえてこない。

俺はふう、と息を吐き出すと肩の力を抜き、能力を解除した。

これでアリアとの邂逅は終わった、原作とは多少違うがアリアにも実力は示した。

後はアリアが俺をどのような人物として捉えるかが問題だ。

まあ、おそらく興味くらいは持ってくれるだろう、Cランク武偵ではありえないような実力は見せたしな。

そこから少しでも関係を持つことができれば原作にも介入は出来るだろう。

（原作みたいに元Sランク武偵ではないから調べられて絶望されないといいな〜）

そんな希望的観測をもって、俺はアリアのいるはずの体育倉庫に戻っていった。

主人公・・・戦闘する（後書き）

とりあえず主人公に周りにばれない程度に能力を使わせました。

ヒステリアモードの約三倍というのは、ヒステリアモードは能力を30倍にするので、主人公は身体能力が原作の10倍さらに一秒を十秒に変える能力を使ったので原作キンジの通常時の約100倍なので、大体3倍かなと考えました。

駄文を読んで下さりありがとうございました。
これからもよろしくです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3642q/>

緋弾のアリア ～怠惰な武偵～

2011年4月5日23時11分発行